

芸術に対する自然の関係

——シェリングをめぐる自然の概念(一)——

吉 田 忠 勝

ルネサンスの本質は、人間性の自覚であると同時に、新たな自然の発見であった。もとより中世のキリスト教的自然探究が、近世の自然科学や汎神論の成立契機となったことは否むべくもないが、しかしあくまで近世的自然は、神に隷属する中世的自然と異質的であるほかにはなかった。そしてこの独立的な近世的自然は、一面自然科学の対象としての機械的自然 *mechanische Natur* であるとともに、他面古代ギリシア的自然の所謂復興としての、調和と生命とを有する有機的自然 *organische Natur*、或いは汎神論的自然 *pandemistische Natur* を意味した。しかしそれはまた、単にその様な外的自然 *äußerliche Natur* としてのみではなく、更に人間の内的自然 *innerliche Natur* として、人間の神からの独立的自由性を支えると同時に、靈的理性的な人格的自由性を打ち破る、非合理的な悪(墮罪)への契機たる意味を担っていた。この様に近代的自然は、錯綜しながら極めて複雑な相の下に論ぜられたのであり、従って近代思想における自然概念は、諸々の思想系列において問われ得るであろう。しかしここには特に、シェリングをめぐる一連の自然概念を取り上げようとする。そしてシェリングの自然概念の成立をめぐるは、それはとりわけ芸術並びに道徳と緊密なる関係にあるが故に、問題をそれらの関係に絞ることによって、自然の意味を考究せんと試みるのである。カントは自然をば、形式に対する質料と考え、形式によって規定されるべきものと考えた。そこに

当為が成立する。けれども自然は、果たしてその様に、形式によって包み切れるものであろうか。ここからしてシェリングは、自然を独自の存在と考え、有機的な自然哲学を樹てるとともに、自然と芸術との一致の基盤を、自然と精神との絶対的同一性に求め、更に自然という非合理的なるものを媒介として、積極的な悪の本質を究明せんとした。以下、一応この様なシェリングの思想展開に随つて、先づ当論において主として芸術と自然との関係を、次いで統論において悪と自然との関係を、考察せんとするのである。

さて、カントに始まる独逸観念論が、一般に主観的観念的なるものの優位を端的に示した中であつて、シェリングは観念と実在との平等観に基づき、真理をば主観的なるものと客観的なるものとの対等なる一致において捉えた。この様な主観と客観との統一たる絶対的なるものが、シェリングの所謂「自然」にはかならなかつたのである。その点彼の自然哲学には、ブルーノからスピノザを経てヘルダーに至る、一連の非キリスト教的汎神論の強い影響が認められる。我々はここで、その様な汎神論的一元論の系列と、カント・シラー的な二元論との交錯のうちに、自然と芸術がシェリングに至つて如何に関係づけられていったか、そしてその際自然が如何なる役割を演じたかを、訊ねようとする。もとよりその過程において、自然と道德との関係についても言及されることは、美と道德との緊密な関連性よりして、むしろ当然というべきであらう。

反キリスト教的立場から、万物の内在神たる神的宇宙靈 *natura naturans* を説き、それをば、現実的事物 *natura naturata* を創造する生の原理として、同時に多元的モナドに調和の原理に基づく統一を与えるものとして論じたのがブルーノであつた。そしてその強い影響の下に、スピノザの神もまた、万物の内在的原因として説かれる。スピノザは、無限の実体としての神の外に物体と精神との有限の実体を許したデカルトとは異なり、個物をばすべて神の単なる様態として、非独立的と考える。従つて、神の無限の属性の中、人間に認識可能な延長性と思惟性とは、共に唯一実体たる神の属性として根源的に同一であり、従つて物体と精神とは本質的に同一と考えられる。この物体と精神

との同一性の思想が、シェリングの自然哲学並びに同一哲学に対して、直接的に、或いはヘルダーを介して間接的に、極めて大きい影響を与えたことは否み得ない。ただスピノザの立場は、発展の概念を有さず、とりわけ人間意志の自由性を拒否する点において、シェリングの立場とは相違していた。即ち延長性と思惟性とは、神の唯一の因果性の異なった捉えられ方に過ぎず、万物は神的必然性によって決定され尽くすと考えられるからである。けれどもスピノザ的な「神即自然」の汎神論は、必ずしも汎神論なるが故にのみ、決定論に陥るとは限らないともいえよう。シェリングの解釈によれば、依存性は独立性や自由性を廃棄せず、神への内在と自由とは矛盾しない。(Schelling: Über das Wesen der menschlichen Freiheit sam. Werke. Cotta'scher Verlag. I. S. 346 f.)——尤もシェリングのこの解釈自体が、後述の如く甚だ問題的たらざるを得ないのではあるが。それ故スピノザの自由意志の否定には、更に別個の理由が存しなければならぬ。即ち彼は、実在性と物体性とを混淆して、全ての存在を物 *Dinge* と看做す機械的汎神論に立ち、精神と身体との同一観から、意志作用を身体的規定に帰せしめることによって、意志決定論に陥ったと考えられる。従って彼の実在論的機械的汎神論は、観念論的原理によって精神を吹き込まれ、意欲を以って根源的と考ええる *dynamisch* な立場へと変革されなくてはならぬ。シェリングは、自然を *organisch* な *ästhetisch* なものと考えるヘルダーの刺戟の下に、スピノザ的汎神論を生かしつつ、それと人間意志の自由性との結合を試みるとともに、他方ラ・イプニッツからは、発展の思想を導入したのである。

ところでカントは、第一及び第二批判において自然を機械的必然的なるものとして捉えながら、しかも宗教論に至って(後に詳説される如く)自然概念に自由性を持ち込むのであるが、その中間にあって自然の自由に対する参画の姿を捉え、それを通して自然と芸術との関係を始めて学的に基礎づけたのが、判断力批判であった。第三批判はいうまでもなく、自然が如何に技巧的に道德を実現しているかを、反省的判断力によって判定する、新謂「自然の合目的性」の世界であり、ここにおいて自然は、道德の象徴的顯現の場として美的であり、また道德の客観的實現の場とし

て目的論的である。その際、自然美を可能ならしめるものは、趣味判断において悟性と自由なる遊動をなし、次いで崇高美をめぐり、超感性的基体または道徳的な叡智的基体に対する畏敬を意識して理性と調和する如き、構想力と考えられる。また芸術美を可能ならしめるものは、理性理念の具象化たる美的理念を産出し表現する天才であるが、天才を構成する心意の諸力は構想力と悟性であり (Kant: K. d. U. § 49, *Kants Werke. Casiners Ausg.* Bd. V. S. 392) しかもそれが本来自然に属するものとして「主観の中なる自然」(op. cit. § 46 S. 382) たる意味において、その本質は自然美の場合と同様に、悟性の規則性を内に宿せる構想力でなければならぬ。ところで、「自然は、それが芸術(技術)の如く観られる場合に美であったが、芸術(技術)は、我々がその芸術なることを意識しつつも、なお自然の如く観られる場合にのみ美と呼ばれ得る」(op. cit. § 45 S. 381) という命題は、自然と芸術とのシェリング的意味における全き同一性を、意味するものではない。蓋し自然は、芸術の如く看做される以前に客観的自然として、逆にまた芸術は、自然の如く看做される以前に主観的技術として、意識されねばならぬからである。しかしそれにも拘らず、両者の間に緊密な連関性が説かれ得る根拠は、観ることと創ることとの原理的同一性に存するのでなければならず、根柢的には趣味と天才との、総じて美的判断力の本質が、共に右の如き構想力にほかならぬ点に、存すると考えられる。かくして究極的に美は、「道徳的善の象徴」(op. cit. § 59 S. 430) 或は「道徳的理念の感覚化」(op. cit. § 60 S. 433) として説かれ、美的理念は、自然の奥の物自体が自由なる人格性としての物自体へ顕現し来たる過渡的姿を示すのであって、自然と道徳との両領域 *Gebiet* は、美の地域 *Boden* において架橋され、統一を与えられた。そして最後に自然全体が、道徳的主体としての人間を究極目的とする、外面的合目的性の体系として捉えられたということは、自然の技巧に関する、知覚の立場から概念的把握の立場への移行を意味し、目的なき美的合目的性が目的意識を宿して実践的合目的性へ客観化されることとして、カントにおける自由因果性と自然因果性との最も深い接点を示すものであった。けれども二元論から出発する以上、直観的悟性 *intuitiver Verstand* は人間能力の限界を超越

する。成程カントの構想力は、美に關する限り判断的直観の能力でありはするが、しかし未だシェリングのそれの如き、知的直観の能力ではあり得ない。従つて「機械論の道において自然の合目的性に出合う」ことはできず、合目的性は、一応「自然の合目的性」でありつつ、本質的にはあくまで反省的判断力の主観的統制的原理に止まり、自然と道德との構成的原理による一層高次の綜合は、未解決のままに残されるのである。

カントの主観的な美の原理を客観化する試みとして提出された、シラーの「現象における自由(自律)」(Schiller: *Kallias*. 8. Febr.) 及び「技術性における自然 *Natur in der Kunstmäßigkeit*」(op. cit. 23. Febr.) の兩概念は、根本的には、或る自然的存在の自己規定性が実践理性によつて發見される場合、実践理性がこの対象に道德的自由の類似を認めることを意味するのであり、シラーもまた、美を通して自然と道德との統一を企てたといえよう。そのことは、道德美に關して一層明白である。カントにあつては、理性にのみ自由が存在した。しかし人間行為の美が問われる場合には、感性もまた同時に自由でなければならぬ。彼の美しき魂 *schöne Seele* や遊戯衝動 *Spieltrieb* や人間性 *Menschheit* の理念は、感性と理性とが調和して、「義務が自然になる」(op. cit. 19. Febr.) 如き境地を意味するものであつて、それはいわば、感性的自然が自らのうちに理性を宿して道德的義務に一致しゆくことであり、「感性的なるものの自己規定」としての「現象における自律」(美) が、「心情の自律」(道德) と合致することにほかならなかつた。シラーにおけるこの様な感性的自然の高まりによつて、一応自然と道德との統一は、カントより一步進められたらうべきであらう。また「現象における自由」と「技術性における自然」との二つの原理が、自然と自由との合致としての美しき魂の中に、根源的な一致の地盤を見出したことによつて、自然美と芸術美との統一が、カントよりも一層深い意味において探られたことも確かである。けれども、シラーが美の「客観的原理」として掲げたものは、実は純粹な客観性を有するというよりは、カントの「合目的性」が、一面判断力の主観的原理でありつつ、他面自然そのものの客観的形式でもあるという場合の、後の面を強調したものにほかならず、彼においてもまた、美の存在論

的究明からする自然と芸術との完全な統一は、果たされずに終わったといわねばならない。また美しき魂は、「人が如何なる努力を以ってしても決して完全には到達し得ない単に一つの理念に過ぎず」(Schiller: *Über Anmut u. Würde. Philo. Bibl. Bd. 103. S. 136*)、現実には義務と傾向性とは分裂せざるを得ぬ場合には崇高なる魂に移行する、と説かれる点において、シラーは未だカントの二元論を脱却しておらず、質料衝動(感性)と形式衝動(理性)との統一の根拠が、究極的には、絶対的實在性と絶対的形式性との最高充足たる「神性の概念」(Schiller: *Über d. ästh. Erziehung d. Menschen. 11. Br.*)に求められざるを得なかつたといふことは、「向世界的 weltzugkehrt」(Korff: *Humanismus u. Romantik. S. 40*)な古典主義的ヒューマニズムから、形而上学的「向神的 gottzugkehrt」(a. a. O.)な浪漫主義的立場(シェリングを含む)への、推移の必然性を物語るであらう。

シラーが反カント的立場から出発しつつ、結果的にはカント的立場の継承に終わったのに対して、スピノザの汎神論に共鳴しつつ、しかも有機的自然観から自然と精神との一元性を説いて、真向からカントに対立したのがヘルダーであった。カントが美を通して自然の中に道徳を觀、シラーが自然と道徳との一致に美を觀たのに対し、彼はむしろ美や道徳をば不可離の姿において自然の中に捉えるのである。自然は自己目的をもって無限に芸術作品を創造し続ける有機的な大芸術家であり、人間は自然の最も恵まれた芸術的産物(Herder: *Kalligone*)として、母なる自然に導かれて、自らも芸術的創造を行ないゆくものである。その際、民族詩が古代の野生的な自然民族 *Naturvölker* の中に探られ (Herder: *Auszug aus einem Briefwechsel über Ossian und die Lieder alter Völker*)、自然言語 *Natursprache* に比して近代社会の技巧的言語の無味乾燥が指摘され (Herder: *Abhandlungen über den Ursprung der Sprache*) 点からしても——但しヘルダーの立場はルソー的な *Kulturpessimismus* ではなく文化の發展の中に根源的生命を回復せんとする *Naturenthusiasmus* である (B. v. Wiese: Herder)——彼の「自然」は本来感性的性格をもつべきものであろうが、しかしそれは、悟性や理性と対立するといふよりも、むしろ理性的及び感性的なる一切を一つのものとし

て産出し、人間をば全素質の調和的発達としての人間性 *Humanität* へと教育するものなのである。ここに自然と芸術とは、母たる自然と子たる自然として、一元的に捉えられ、美の根拠を形式に求める主観的観念的立場に対して、それをば事物の完全性に求める強度の客観的實在的立場が成立した。しかしながら、客観性への徹底は、やがて客観化そのものの無意味化を来たし、自然と芸術とは、実は外なる自然と内なる自然、換言すれば外なる芸術と内なる芸術として、所詮同一物になり終わるであろう。また彼が美を完全性の表現として捉え、そこに美の客観的原理を見出さんとした試みは、あらゆる完全性の表現が必ずしも美たり得ない点よりして、やはり徒勞であったというほかはない。従つて、一方主観性に優位をおくカント・シラーの立場と、他方絶対的自然を説くヘルダーの立場とは、何れも自然と芸術との關係に充分な説明を与え得ず、問題は更に、これら両立場を統一するシェリングの絶対的同一性の立場へと、持ち越されざるを得ないのである。

フィヒテの知識学を離れたシェリング独自の哲学が、自然哲学として出発したというところに、すでに彼の立場の性格は示されているであろう。カント的二元論がフィヒテ的倫理主義のうちに解決を見出し得なかつた以上、それを救うものは、逆に一切を自然のうちにおいて捉える、ヘルダー的な一元的自然主義のほかにはあり得ない。彼の自然哲学は、ライブニッツ的な生命の概念に貫かれるとともに、上の如き一連の非キリスト教的汎神論の延長上に成立した。彼にあっては、対象的自然と人間精神とが、共に能産的自然の所産として本質的に同一である以上、自然と芸術との關係は、客観的自然と主観的芸術とのそれを超えて、より深く産出的自然と人間の芸術とのそれでなければならぬ。古典主義的思想家の美学理論が、「自然の学からよりも多く魂の觀察から」(Schelling: *Über das Verhältniß der bildenden Künste zu der Natur*. säm. W. I., S. 295) 導き出されたのに反し、シェリングはあくまで「自然の中に実際に存在するもの *das in der Natur in der That Seiende* を描く」(op. cit. S. 302) ところに「芸術の成立を觀る。カントにおける芸術的自然は、現実的自然の与える素材から創られた」或る他の自然 *eine andere Natur*」

(Kant: K. d. U. § 49 S. 389) であり、またシラーのそれは、すでに失われた古代ギリシアの素材なる自然ではなくて、文化を経た後に復帰さるべき自覚形態としての自然 (Schiller: Der Spaziergang) 或は Arkadien から現実の歴史を経て到達さるべき Elysium (Schiller: Über naive u. sentimentalische Dichtung, S. 378) としての理想化された自然であった。これに対してシェリングは、その様な現実的自然と芸術的自然との二元性を排して、自然の本質究明そのものから彼の芸術哲学を出発させるのである。

一般に浪漫主義的人間は、万物の尺度たる内面的人間性そのものから歌い出す古典主義的人間とは異なり、むしろ人間の限界を破壊して背後の無限の本体と一つに融け、自己をいわばそれによって奏でられる楽器とも感じていた。例えば F・シュレーゲルによって人間の言語詩の原本と看做される如き、宇宙遍在的な無意識的・無形式的詩に対し、芸術家がそれとの一体感において、その意識的表現形式を探り当て得た時、宇宙的原本詩に対する派生的人間詩としての芸術作品が成立するのである。その意味においてノヴァーリスは夜や神を、ティークは諸大元を、ヘルダーリンは大気や大地や大洋を讃え詠った。シェリングが個々の芸術作品において、背後の原本的な無限的生命の表出を觀たのも、かかる浪漫主義的感情と、決して無縁ではなかったであろう。能産的自然は、「世界を体系にまで形成する有機化的 organisierend な原理」(Schelling: Von der Weltseele) として宇宙靈 Weltseele とも呼ばれ、ゲーテやノヴァーリスに受け入れられて所謂ゲミニウト^{*} Gemüt の本体と考えられたのであるが、ゲミニウトがとりわけ浪漫主義者にあつて、あらゆる芸術の最奥の本質を成す意味においても、芸術の創造活動はまさしく、産出的自然の創造活動に参入して、これに「熱心に做う nachzueifern」ところにこそ、可能になるであろう。蓋し芸術活動とは、客觀的自然を模倣する nachahmen ことではなくて、本質的自然との一体化であり同一化でなければならぬからである。

* 「世界は遂にはゲミニウトにならないか」(Novalis: Fragmente) といわれる如く、浪漫主義においてゲミニウトは、単なる個人的心情であることを超えて、宇宙靈の有する一種の熱気を意味し、個人的心情はそれに融入参画することによって

始めて、芸術活動をなし得ると考えられた。

けれども、自然哲学期におけるかかるヘルダーの立場には、未だシェリング哲学の本質的性格は、窺われ得ないであろう。創造的自然が、無意識の所産から精神的所産に至って自らを反省するという、實在性から観念性への方向を有する自然哲学に対して、逆に、知的直観によって一挙に定立される絶対的自己意識が、理論哲学・実践哲学・芸術哲学の三部門に互る幾つかの勢位を経て継起的に展開されゆく、観念性から實在性への方向を採ったのが先驗論的観念論であり、更に、観念的なるものと實在的なるものとの絶対的同一性（絶対的無差別性）としての根源的存在が、両原理の量的差別によって自然界と精神界とに同等に現象するというのが、同一哲学であった。従ってシェリングにおける、自然哲学と精神哲学とを一層高次の立場より基礎づけるのが、同一哲学であった。従ってシェリングにおける自然と芸術との統一は、先驗論的哲学、更には同一哲学において、より深く探られなければならない。

カントの「美学」がシェリングの「芸術哲学」へ移行したということは、形式的自然を趣味や天才の対象とし、美を道徳的善の象徴と観る如き主観的立場を超えて、右の如く自然をあくまで内容的に観照しつつ、しかも自然の美の規準をば、産出的なる芸術の原理に帰せしめることを意味するのであるが、かかる立場は、芸術的天才が、「世界の聖なる永遠に創造的な根源力 *die heilige, ewig schaffende Urkraft der Welt*」(Schelling: *Ů. d. Verhältnis d. bildenden Künste z. d. Natur* S. 293) を直観的に把捉し、自らもそれに倣う創造的活動のうちに、却って多様な対象の背後の自然の本質をば啓示することによってのみ、可能である。シェリングが観念的なるものと實在的なるものとの究極的綜合を芸術活動に求め、芸術作品のうちに意識的な技術 *Kunst* と無意識的な詩情 *Poesie* との一致を捉える場合、芸術家を背後から駆り立てる詩情が自然の恩恵によって賦与されたものと考えられる点からしても、両者の一致もはやカント的な心意能力の關係であることを超えて、意識的な精神活動と無意識的な能産的自然活動との同一を、意味するものでなければならぬ。即ち芸術は「真に存在するもの」の示現 *Darstellung*」(op. cit. S. 302) であり、美は

「有限的に表現された無限者」(Schelling: System d. transzendentalen Idealismus. säm. W. I. S. 620) であつて、自然の本質は、芸術によつてこそ具象的に把握され得ると考えられる。この様に芸術が、「かの最高者の絶対的實在性に関して、我々を確信せしめるに違ひないところの奇蹟である」(op. cit. S. 616) ならば、かかる奇蹟を行なう天才は、「意識的なるものと無意識的なるものとの間の予定調和の普遍的根拠を含む、かの絶対者 (原自我 *das Urself*)」(op. cit. S. 615f.) であり、更に絶対的原自我は同時に絶対的的自然たる意味において、天才は「それ自身決して客観的となることなく、しかもあらゆる客観的なるものの原因たる、最高の絶対的に實在的なるもの *das höchste absolut Reelle*」(op. cit. S. 619) でなければならぬ。カントにおいて天才が、「主観の中なる自然」として説かれた場合、その自然は客観的自然を意味した。いまやシェリングにおいて、その自然が絶対的自然に置換されるならば、天才はいわば「主観の中なる絶対者」として捉えられるべきものであろう。更に同一哲学の立場において、美が實在的に直観せられた絶対者であり、芸術が絶対者を対象のうちに表示するものである限り、芸術的天才は、観念的側面における絶対者そのものとして、その作品のうちに産出的絶対者そのものの作品を實在的たらしめるとともに、無意識的なるものと意識的なるものとの同一性の根拠たることによつて、自然と芸術との統一の根拠をばなすのである。そして、カントにおけると同様シェリングにあつても、天才の中心的能力は構想力として捉えられようが、構想力はここにおいて、全人間生活を貫く最高能力であるとともに、全宇宙存在の根拠たる地位を占めるに至る。それは、知的直観(哲学的生産)とそれの客観化たる美的直観(芸術的生产)、総じて「自我」の活動一般を可能ならしめる根源的能力であり (op. cit.)、更には、観念的なるものと實在的なるものとの同一を根源的に可能ならしめることによつて、「一切の創造を基礎づける同一化の力 *die Kraft der Ineinsbildung*」(Schelling: Philosophie der Kunst. säm. W. I. S. 386) であるとともに、単に多様を統一する力たることを超え、一切の個体存在を可能ならしめる「本来的に創造的な個別化の力 *die Kraft der Individuation*」(a. a. O.) として、全宇宙的存在の根拠たるべきものである。即ちそれは、た

だに人間の根源的創造力たるに止まらず、より根柢的には絶対者そのものの根源的創造力にほかならなかつたのである。^{*}

* カント(第一批判及び第三批判)からファイヒテを経てシェリングに至る間の構想力に関する詳細は、『哲学研究』第四六五号掲載の拙論「独逸浪漫主義の生活原理」中の「想像力」の項を参照されたい。

かくして自然と芸術とは、絶対的同一性の現実的顕現として本質的に同一であり、前者は實在的同一性として、後者は観念的同一性として、相対的な対極の関係において捉えられてよいであろう。一方自然が、自己啓示のうちに芸術を可能ならしめる芸術の原型であるならば、他方芸術は、自然をして顕現せしめることのように、自然の美的可能性を顕示するものであった。そして更に『ブルーノ』に至り、絶対者が遂に神として説かれる(Schelling: Bruno. sam. W. I. S. 329)に及んで、美は遂に現象における神の啓示として捉えられる。神が原像的・即自的に直観されるのが真であり、対象的・實在的に直観されるのが美であるということは、あらゆる芸術の直接の原因が神そのものであり(Schelling: Ph. d. Kunst. S. 386)、事物の形相を神における如き絶対的姿のうちに描出することが芸術にほかならぬ所以を、示すであろう。ここに、カントの「主観の中なる自然」は、「人間に内在する神的なるもの」(Op. cit. S. 460)として、いわば「主観の中なる神」となり、シラーの「現象における自由」は、「現象における神」において、その最も深い根柢をば見出したのである。まこと、「宗教なくして芸術はあり得ないというのが、浪漫主義の第一原理の一つであった」(R. Huch: Die Romantik. II. S. 345)のであろうが、かかるシェリングの宗教哲学の立場に至って、自然と芸術とは、ともに神の啓示として根源的に同一なることが示され、カント以来求められ続けてきた両者の統一は、ここに一応その究極的な地盤を探り当て得たといふべきであろう。

しかしながら、シェリングが芸術の根基を追求しつつ、『ブルーノ』に至って遂に現象界から隔絶せる理念の苑にさ迷い込み、美をば永遠の原型ワッヘルトとの一致における、非時間的なものとして捉えた(Schelling: Bruno. S. 225f.)とす

うことは、全てを「絶対的無差別性」の模倣と解する彼の立場からは、一応当然の帰趨であったであろうが、美に求めらるべき目的論テレオロギイから恰も神哲学テオソフイイへの飛躍を想わしめる意味において、本来の美学的立場からは、当然批判されるべきものであったであろう。我々にとって切実なのは、その様な理念的芸術ではなくて、現実的な人間芸術でなければならぬ。従ってかかる現象美への反省が、「芸術哲学」華やかなる独逸観念論の中にすでに胎動しつつあったことは、故なきことではなかったと考えられる。例えばゾルゲルは、理念と現象との間の矛盾から出発し、理念が「現象の虚無性 *Nichtigkeit*」(Solger: Erwin. Bd. II. S. 281)を通して無に消散する、悲哀に満ちた転移の瞬間に、芸術の真の所在を見出すのであり、虚無性の中に身を沈めるかかる美なるものにおいては、天上的なものと地上的なるものとの完全な相互移行が可能となり、有限的なるものが無限的なるものとの分裂を通して、却ってそれと一たり得る所以が示される。理念と現象との、かかる矛盾を介しての統一に、所謂「美の悲劇」が成立したのである。またシェリングの芸術概念が、その最高優位の強調のあまり、他の文化概念と不明確に混淆され終わったのに対し、芸術の問題を一つの厳密な大論理体系の中に位置づけたヘーゲルは、自然と芸術とを、同一理念の弁証法的発展の異なった段階の姿として、一元的に把握することにより、美を「理念の感性的顕現」と看做し、芸術を「絶対的精神」の中の特に感性的なる現象様式として説明した。けれども、たとえ理念の否定としてのゾルゲルの「美のはかなき *Hinfälligkeit*」(op. cit. Bd. I. S. 10)が、容易に現象学派のベッカーのそれ (Oskar Becker: Von der *Hinfälligkeit* des Schönen und der *Abenteurlichkeit* des Künstlers) を想わしめるにせよ、またたとえヘーゲルの立場が、美の「感性的」規定の故に、一見シェリングの理念性に対する一種の具体性の外観を呈するにせよ、それにも拘わらずゾルゲルの本質的関心は、理念の否定、そのことよりも、むしろ否定さるべき理念の側に存し、或いはヘーゲルにあっては、自然美を「不完全なる美」と考える如き芸術美の偏重が視られる意味において、「美の悲劇」も「理念の感性的顕現」も、所詮シェリングの「芸術の奇蹟」と同様に、あくまで理念の側を重視する「芸術哲学」に止まっており、やがて美学独自の原理性

の主張の下に、観照者の受容的体験のうちに美の本質を探らんとする、所謂「下からの美学」を喚び起こすに至ったのも、蓋し当然というべきであらう。 (了)

(筆者 京都市立医科大学〔倫理学〕助教授)

Natur und Kunst

—Im Umkreis von der Problematik des
Schelling'schen Begriff der Natur (I)—

von Tadakatsu Yoshida

Kants Begriff von der Zweckmäßigkeit der Natur, mit dem zwar eine Beschaffenheit der Natur an sich gemeint war, bedeutet jedoch im Wesentlicheren das subjektive Prinzip der reflektierenden Urteilskraft. Der Begriff der Freiheit in der Erscheinung wurde von Schiller für das objektive, die Schönheit ermöglichende Prinzip gehalten, welcher Begriff doch ein Analogon zur subjektiven moralischen Freiheit bleib. Der genannte subjektive ideale Standpunkt und der Herdersche objektive reale sind bei Schelling dazu gekommen, miteinander vereinigt zu werden. Er sieht im Natur und Kunst je eine wirkliche Offenbarung der absoluten Identität, d. h. in der ersteren die reale Identität, und in der letzteren die ideale. Also sind Natur und Kunst dem Wesen nach identisch, und somit hat Schelling diejenige Einheit der beiden ans Licht gebracht, die seit Kant vielfachs erforscht worden ist. Aber seine Natur-und Kunstauffassung führte letzten Endes zur Spekulation der Schönheit als überzeitlicher Idee, wogegen so etwas wie "Ästhetik von unten" zustande gekommen ist.

Art and Technique

by Kenjiro Yoshioka

It is by means of clarifying the meanings of two words, 'art' and 'technique', that the author tries to defend the position of art in an age of technique.

In the course of history words naturally changed their meanings, and these changes in the meanings of words tend to result in rendering our thoughts indefinite and even in obscuring the meaning of our own existence. A historical investigation, therefore, might be helpful to our task.